



歌の父

宝暦十一年（一七六〇）

尾花徳

中村俊定文庫
文庫 18
378



序

四時の中ふ四つ此物あり是哉
きけり世に其神姫孺老
をけり此四つ乃物也在時香
月雪若流石よりおる鏡さ清
北蓮塘に何り清く
賤きあふ芳々乃き此葉
くぬを吹くは事拾ひてハ

去来身然ふき沈みあられ
をふに戸を花の所也と
さうまに一部に数えたり
時ふ名れ一撰者尾谷と
いふや故人盤谷の旧名
ありをもちあはるあやうふ
申しまへるあきはき
山の井は海にけりあや

父ともあつたあやうふ
岩代松乃のあやうふ
をぬくあやうふ

戀稻菴湖十



とちん

李

五



四季混雜



抄中尺一遙く梅鉢の如き
 生海蔵と云ふ別名く花生
 吹々や道灌山は秋乃色
 其色如何と云ふ處の可き補
 菜の如き篇中申ふ所入口の聲谷
 本と云ふ所所行 補を聲の下
 西谷

静るも水もけふの泉谷
 宇人比寿中かふく 室のあ 英谷
 上はくもくもく 却るも 壽谷
 見る人小尖きさく 藤の 加崔
 漕りも大川とて 凍舟 如山
 植木公のり 花 駿府 雅明
 名も身ゆふ 教の 祇堅
 夕影也十人 並結集の雪 葉谷

眼も毒も毒結 葉のり 原富
 美舟のり 後光 雨光
 弓形也 小舟のり 雪兔
 図画も 女と見ゆ 梅谷
 下風も 通のり 交大
 吹谷
 畔も 勝るも 南谷
 風のき 跡も 呂谷

解の相を鑑るゝ鳥は暑小 蓬壺
茅渚城へ通ふ思ひり硯水 吉門
日名新とつりあひるえき秋 奥樂
杜宇 七川の地を居深きる主 尾谷
乙月あや雛も咲く牡丹畑 周谷
松ふくふきのちや帝 雛 紀象
菊のりや井戸かき込へ鷹の酒 寝郷
花の山 下谷中を流るる水 蓮谷

罪守張茶入と紙を釈さるる 尾谷
橋より見る日次は似る鳥の 紀逸
常の如くはさるる初を姑 信鳥
只いへく候もさし山依久良 和丈
上々菊の花は名川柳うね 螢谷
海向人戸より見通生哉塘谷
行へぬ花をあるまき寄居虫代 祇洲
名花の結成んと解島の花は秋夕

江山崎位宗澄特色紙松永貞徳翁
能経冊を承りし亦

東長公より宗澄の叔父して紙を
伝へて古筆万延と一紙に承りし
連宗澄の紙も正筆とて紙中見
事なりと云ふやうに極れりぬ
るは此紙根岸姓方より上野の末
雨のち承りし紙も宗澄の筆蹟中
一紙に承りし紙も宗澄の筆蹟中
々々々々々々々々々々々々々々々々
雷鳥紙 國紙 尾谷

梅崎也常也事如人足如人 一磨
舞雀ふんの所一春已小 平久
志んめ也別水の袖結松元 河東
字ん比事也宗澄也末も能分望 沙洲
濁江中事と云ふ柳小 蘭示
事柳也世と風歌の京音 河良
考也合事ハ多の調子升 良波
新月也濁りも多き酒斗 尾谷



睦月の末始二日臥齋始
宝夢の杖と費く

日始飾と心乃也梅の畔松
星合也考と携も枕も
七夕や月おかくすもかくし
細帯も新形昨始寝る
手紙中物手太即若近
一声始未接雲心とさ
長谷
湖十
富教
藤四
平佐
尾谷

枝葉くさき海へついでる柳哉 曉翁
 黄金地じのり八を福壽軒 榮谷
 新緑也津中宿も皆月三 夢丈
 家くみむし 節かきも子 少長
 鳥覽測るもくも 可圭
 光の眼もみえりかき 川谷
 柳見とくもくも 茶水
 雨戸濡る言とついで 尾谷

ありあけ花のちるえき松魚小 湖十
 いまやあけのちるえき雨和 道院
 晴とく雲也伝り也き紫山 三笑
 晴とく雲也伝り也き紫山 魚樂
 ありあけ何とくも 珠来
 有雨也きも 桃水
 川船のちるえき 亀幸
 桃もや門方遠眼地を 尾谷



歌仙

塔中途中低く夏木立 方國
 耳に珠をもち給ふ初憚 尾谷
 子福若珠八重より外を名をうく 芳竹
 明眼方の押お月言 玉珂
 浄土の月を吟詠と清く 沾涼
 山の端と雁の毛 西谷

龜谷

著

王珂

方國

沾涼

尾谷

方國

玉珂

芳竹

沾涼

王珂

兩谷

沾涼

芳竹

毫谷

玉珂

金張きと好けの聲おけく似合	方國
鐵をわくく水碓の聲	尾谷
うさお姑好きと雲と好く	芳竹
四角のふききと山伏	方國
子あらしと歌出勝	玉珂
屋根も鹽も一時中漏	沾涼
衣のききと好きと名は實	方國
神田の好きと水方面	西谷

はくしんせいのききと思ふ	芳竹
旅のききと酒場の事	玉珂
帆柱のききと海へ行く所	沾涼
和歌のききと歌の	方國
提子のききと花の下	尾谷
蝶のききと橋の聲	泰谷

中の町おきく

澹もみき花中うとくは別れ
 泥と出くも交にうとくは別れ
 おしとくは別れとてうとくは別れ
 ねとくは別れとてうとくは別れ
 宇衣比也や唐土を知らぬ玉の友
 山寺は澹の神さよとくは別れ
 雲初くも雲を極のふとくは別れ
 傘とてあへてうとくは別れ

尾谷
 珪瑛
 銀谷
 梅勇
 龜淵
 魚谷
 林谷
 銀谷

大なるもくは別れとてうとくは別れ
 古に世は下さうとくは別れ
 常の世は下さうとくは別れ
 合歌の世は下さうとくは別れ
 耳も月も雲も下さうとくは別れ
 辛嶋も雨も下さうとくは別れ
 帆柱と賭をうとくは別れ
 以てや柳の枝も下さうとくは別れ

樓川
 難口
 榮谷
 其飽
 桃谷
 曉翁
 尾谷
 超雪

馬帽子をうけ水は清き如き
 花の雪霽ももる如き
 足海をなすの如き
 埋火もあけし如き
 十日月が解きわさし
 招くも解くも此
 花は結ぶもなすも
 沖原一畑の子
 慶子
 東長
 紫谷
 亀幸
 梅勇
 蓮谷
 尾谷
 欽谷

駿場へ旅立ちし時

神の如くと年を當るの月日
 治承の如くも何れも
 多岐の如くも何れも
 入水も流るる如くも
 名月も清き如くも
 白魚もわける如くも
 其飽
 亀幸
 桃水
 吹谷
 南谷
 尾谷

山川の麓にありては露牙
介待の虎に口をきき置け
山人の安と静にふす所
春堂

上野くまのり

入おちりても敬し山さへ
風やまをき松のふ本
名月や汐うの海に照か滅
樓船大船多し秋のそ
呂谷 周谷 紀皋 首原

陣跡跡を記すも
節ははき梅もつと口口
月如卯年を結淋しき
梅水

秋感陰思女

今や女とわかれし其貌
宇山の照ありきや
因雨のそし涼き清水に
之の紫結散ありき
葉谷

穀山結葉中葉と那高野
 かけらの御もあまの御も
 花を筒中喰ふるる御も
 沙路崎山海と通ふ清水小
 此處をハのさうと結ふ御も
 此も木も葉の時分始るの声
 野中 小判とさる 師乞の
 各月の下戸も御も 明安の 榮谷

衣の如く人にも衣のえ
 片煙の如く御も浦子島
 鶴の御も葉の御も
 江戸中の中 船の御も
 松の御も葉の御も
 源の御も葉の御も
 著の御も葉の御も
 桂の御も葉の御も

海如 雨谷 三井 柏車 銀谷 文谷 林谷 桂谷

子安の物に花柳の紙巻も
あす月のおとそきふれり
新月の海に玉珠の光る
庭堂

江之島

田へ遠く一帯へ近く一畦石
是も種に花と流るる水
牛飼のせり居りより更衣
露の袖に薄菊の消色
尾谷
雨谷
近谷
敬人

金利抄の濱に月日経る
迎ふも風道へ立所の
雨谷

二種の花へはさまりく
花の中月夜と花を
尾谷

江之島

おとそきふれり
振分はたけと端の
菊合を掃るふれり
梅雪
長谷

三浦二也未々新田千歳乃良

紅谷

之園主

水身と浸るも根着山

羽谷

更けも滝水と一水

萱谷

桐多中草鞋を穿く山

銀谷

雪結樹多中移り夕山

駒乗

取中唯

雪中雪く二人水着

尾谷

孟ハ雪よりけり

葦谷

雪雪地帯と依り建ち

蓮壺

うー秋と雪よりく

祇刈

人知水白雪雪の

秋夕

雪結雪散雪の

尾谷

雪結雪と雪よりく

柳尾

うー雪よりく

家榴



般若

經

とく
 廣
 一
 奥の
 心

六、三章

望成様中よりおけよ

むすふ中なる

云作此傳と怪し

門の横

ふり中照と

流此

少納と

海河
 雅明

仕形く情のふひふん居
朱の儀へ旭の福託を局
娘は女登忍の蘇小娘を
口上も會さぬのうハ上リ
昔中印水と階ちかおあ
世の年と祝のころ萬蒲叶
空を消遣く空治の銭
商人と夢ハ馬山矢子探く

足後片所 水朱不結門
月をふつとく如奇の歌
樹中思をうふ此處の声
風を衣ともふと出く
南隣を武士を後く
こころは肝へふつ四娘を
衣此羅衣雨の徒然
大略の一統志より列女傳

人多料の公界十平
下戸の如身は樂しき下戸
藤原中深ら四方の山く
織原中云事お深味小紋歌
お深味おと輪かゝる
まの月夜も鳥も春も
浦の管金鼓音あかき
僧止の衣ゆがき 林

琵琶の涙の雫めがら
斗多中々もさびた一花二
いよよ人々若きる巻
存多中花の雪は花の宴
あよよいふさの 藤原

藤原中田中藤原中
飛渡原也男はさき公家能 沾輅

老あも 穠きも 松の花
 手のく 花も 欲せしむ
 常 来く 風と 恨る 懐の 風
 未 淋し 趙之 麻姑 泣く
 峰 津 雲を ちき ね 風
 為 連る 人 國 國 寄の 裏
 精 可 明けく 之 寄 海 梅 外
 門 並 結 黄 へ も ち なる 田 畑 小
 梅 芳 尾 信 妻 蜀
 青 波 谷 谷 稻 家 狗

青梅吟

今 昔 也 陸 上 一 二 陸 上 架
 十 幾 中 袖 亦 拂 ぬ 揺 風
 居 海 の 時 昔 へ も か 新 風
 王子の玉座中 花あり
 子 乙 女 也 足 の ち ぬ 声 は 花
 今 昔 春 春 春 春 春 春 春 春
 か け 日 市 ち ち

之のくを何路かた様をきく

袍谷

立十郎川子不降と清く

立月雨人ふらり立十郎川

屋谷

裸身入る水塵はゆふ

雨谷

秋暮る水津あけし秋程

慶阿

名月也声とが子のもて

青谷

之縁と人々すも秋は極

給谷

我花く近き世の柳

淋し秋ありはけり秋のき江永

冷の丸山あけひく

春秋のきや小春の山はき木賢

秋夜もき秋きや長巻の月雨谷

百種此種中きよの身は岸山尾谷

老水云衣也きりき種き雷魚

月代もきききつら室さ能戀阿

松松もききききつら室さ能大町

さうや

おめり

羽月

さうや

図



盤谷

二代目尾谷改盤谷

七夕より雪は舞ふうり

玉阿

梅も雪のちみち

賢谷

名月や雪は波の波

尾谷

人形中を氷りおど

板谷

鶴の細きうり五月雨

長

おれを料子り橋皮のちり

平仲

かき流さるるに雨

貞貞

初より

図大

町西師妹澹道に結くはきん 尾谷
玉照へ傳く雖の灯影は

花多山く

此の儀の又たきりし風のき 方国
善出やふりながら并のき 女 青高

泰谷と連くあけり

恥しと酒くらふと観る 女 梅千
筆や善き人目の目あき 女 泰谷

幸やめ肩妹あきぬ雖う 女 史教
し秋や唐をき未き 女 真谷
岫と出る人も有るき月 可圭
花の嶺峨東原の人をえぬ 龍山

北蓮塘より舟の流るるあつ

漂る水風帆様も初雨 柳倉 白陽
きけりもききし如日けり山極 尾谷
草花紫千子の糸川蓮山 兼陽

七夕の夜をぬくも七うの瀬 湖海

廻文

只此酒よりあけはるの風 環山

故盤栗の石を磨き以て尾谷より

乙雪をたきかきぬ谷修ひ 芳竹

初穂の産湯よりけ桶のふ 長雀

石山奉納

月影の湖水より清き水は 尾谷

奇僊

行々を細みたる浦の鳥 盤谷

新神の教をふりしる 尾谷

手懸のつるを渡の輪はく 湖十

沼糸のつるを糸渡り 紀途

名月映りたる水の底に 尾十

秋空のくもりの横糸

露角力よりやぬる人の舌 紀

十毫紀十毫紀十毫

純十尾純十尾西谷純

讀くはるあを丸山の
 飯焚を海村の煙をのこ
 鳥子出する深蛇のふい
 ちきくを立筆大師の
 尺牘の辛味を記討
 道連より小唄うる乙女
 泣く出る何と松虫
 形も清夜のあふ秋の
 毫 十 尾 十 紀 泰谷 毫

酒をのこあふる
 何より勝る蟹中の二ツ
 酒磨の内裏の地を指
 花の目も揺るの音の
 雪は解る風のふり
 十 純 尾 十

鯉のきりし藤入をこい
 飯焼も茶をのこる
 京 太 谷

柳邊より遠く松林の里 湖十

飛鳥山へあがりて

白雲を流る河川のたふらぬ 竜谷

卯の光に東風を吹く 江戸の

清き水と竹す

雲梯は年切の如く、時を 度谷

一掃千石と云ふ松の花、

予く父の年と云ふ六の松院へ世馬の

浦の松と云ふ

葉は種も善徳の種も花より、

泉谷の赤高亭より

松よりと云ふ松の柳は、

祇園君の松の松の松の松の松の松

より松の松の松の松の松の松の松

賜ふ松の松の松の松の松の松の松

つゝ松の松の松の松の松の松の松

如斯ハ唐の如クの一々ハ
 家土も花もあらざる
 祇例
 裁く藤も和歌の種
 尾谷
 近き月夜も在の如き
 秋夕
 之の組木果の目出る
 迂谷
 稲花の客を門が祿次する
 雁行
 峰年志る松の口笛
 登仕
 月一山みづもく上る月足舟
 湖十

木よりいかに安か
 鳳山

渡

市燈師も徳く風流
 花ひしう
 其の風子流
 字も難し
 有まのふ
 うみ河折るも

唯し〜とてとて
交年あはれうの所
上中〜とてとて
あはれうの肖像
まが〜とてとて
月雪どあうわ出と

た〜とてとて
一冊子と〜とて
と〜とてとて
あはれ〜とてとて
あはれ〜とてとて
あはれ〜とてとて
あはれ〜とてとて

子以經之介之

宗譜士已

北蓮塘

仲冬

尾音



